

正誤表・更新情報

本書中に訂正・更新箇所等がございました。お手数をお掛けしますが、下記ご参照頂けますようお願い申しあげます（2021年3月5日）

■第1版 第2刷（2020年12月15日発行）の修正・更新箇所

※第1刷からの修正箇所はhttps://www.yodosha.co.jp/correction/9784758102483_corrections.pdf をご参照ください

| 頁 | 場所 | 修正前 | 修正後 | 補足 | 掲載 |
|--------|--------|---|---|----|----------|
| 練習問題解答 | | | | | |
| 246 | 実践編9講① | t値=4.1534, 自由度=73をダウンロードしたExcelファイル(241ページ文献5)に入力すると, $r=0.44$ で中程度の差と判断できる. | 効果量 d : 16名の片足立ち時間は15.38 ± 10.85秒, 転倒なし群59名の片足立ち時間は55.24 ± 37.80秒である. ダウンロードしたExcelファイル(241ページ文献5)の「 d の計算」内, 「2. 各群の人数が違う場合」に“人数(n)”“平均(Mean)”“標準偏差(SD)”をそれぞれ入力すると, $d=1.17$ と算出され, 効果量は大きいと判断できる. 効果量 r : t値=4.1534, 自由度=73を上記同様のExcelファイルに入力すると, $r=0.44$ で中程度の差と判断できる. ➡ 効果量 d を使うかを使うかは, どちらを使用しても間違いではありません. しかし, どちらかという効果量 r を記述するほうが一般的です. ただし, 問題②のような検出力分析も行う場合は, 計算のために効果量 d を使用するので, 効果量 r と d をともに求めましょう. 効果の程度は r で判断し, 効果量 d は検出力の計算のために求めるという目的です. | | 21/03/05 |
| 246 | 実践編9講② | G*powerを起動して, 図Aのように設定する. ①から②と必要事項を入力し, ③のボタンをクリックすれば④のように検出力が出力される. この結果では, power0.3376694なので, 検出力は約33.8%で低いという結果である. しかし, 検定結果は有意な差があったので, 症例数が足りないというよりも, 差の大きさの評価を重視したほうがよいと考える. | これは, 集められた対象者数が検定に十分見合った人数を満たしているかどうかを調べる方法(236ページ質問13)である. G*powerを起動して, 図Aの①のように設定する. ②に必要事項を入力し($n=16$ と $n=59$ は逆に入れても同じ結果になる), ③のボタンをクリックすれば④のように検出力が出力される. この結果では, powerが0.9836494なので, 検出力は約98.4%で非常に高いという結果である. 検出力は80.0%以上が理想であるため, この検定における n は十分満たされていることがわかる. | | 21/03/05 |
| 247 | 図A | | 下記※1参照 | | 21/03/05 |

※1 下の図への差し替えをお願いします(②のEffect size dの値, ④の値に誤りがございました)

